

「J-POP マーケティング IT時代の音楽産業」の要約

第6章

J-POP 市場における音楽ビデオの役割

映像作品は音楽を伴う

映画にしてもテレビ番組にしてもビデオ作品にしても、映像作品はほとんどの場合音楽を伴う。ドラマやアニメーションなどは主題歌や挿入歌に加えてBGM（劇伴音楽）を伴うことが普通である。またドキュメントや記録映像などノンフィクションの場合でも、タイトルバックの音楽に加えてBGMが挿入される。ニュースやスポーツの番組でさえ、タイトルやエンディングに短いテーマ音楽が使われることが今では当たり前となった。

音楽は脇役

映像に付随する音楽はあくまでも脇役であり、その役割は主役である映像の内容を引き立たせることにある。ただし、場合によっては音楽が映像の単なる引き立て役という付随的な立場を超えて、結果として準主役や主役を務めてしまうこともある。例えば映画やテレビドラマが、それ自体は大きなヒット作品にはならなかったにもかかわらず、その主題歌やテーマソングがヒット曲となる時がある。そんな時、音楽を聴くことが主たる目的になって、映像作品は鑑賞される。いずれにしても一般的な映像作品では初めに映像があり、それに音楽を付加することによって作品の完成度を高めようとするが行われる。

ライブ映像

しかし、映像作品には最初から音楽が主役となっているものがある。それらは映像作品でありながら、映像と音楽の立場が逆転して音楽が主役を演じている。そのような作品の多くは、単純に映像が音楽の引き立て役に回ったものではない。例えば、音楽映像の1つのタイプにミュージシャンの演奏を撮影した「ライブ映像」というものがある。この場合は音楽を引き立てているというのではなく、映像と音楽はもっと一体化している。

イメージビデオ・コンセプトビデオ

さらに音楽映像のもう1つのタイプに、イメージビデオあるいはコンセプトビデオと呼ばれるものがある。これは音楽の作り手や演奏家が抱いている音楽のイメージやコンセプトが様々な手法で映像化されるものだが、この場合も映像と音楽は、ライブ映像とは別の

意味で一体化している。

この様に音楽が主役を演じる音楽映像は、音楽そのものがビジュアル化されるものであり、アーティストの音楽や音楽性が様々な形で映像として具象化されている。この場合は一般の映像作品とは逆に、初めに音楽があり、それに映像を付加することにより、その音楽の作品としての完成度をさらに高めようとするものである。

反対意見

音楽というものはそれ自体ですでに完成されたものであり、映像のサポートはあまり意味がなく、むしろ無用なものであると言う人もいる。このような見方をする人にとっては、音楽は聴く人一人ひとりが個別のイマジネーションを抱くものであり、音楽映像はそれを限定してしまうもの、ということになる。しかしこのような考えを持つ人は少数のようである。プロデューサーやアーティストの多くは、音楽は映像との結びつきによって、作品としての価値が高まり完成度が上がると考えている。

参考文献

(編)著者名	刊年	書名	出版社
岸本裕一 生明俊夫	2001 年 1 0 月 20 日 初版発行	J—POP マーケティング IT 時代の音楽産業	中央経済社